

矢吹町での大滝清雄とは？

教師と詩人の 清雄さんとは…？

「当時の矢吹中学校は、兵舎が校舎でした。戦後間もない頃でしたからね。その校舎で、中学1、2年の時に国語を習ったのが大滝先生でした。授業が始まる前には、先生自ら詩を朗読してくれました。中原中也や草野心平…いろんな詩を読んでくれましたよ。すごく通る声で、印象に残っています。」

あり、「さわやか詩集」の審査員も務められています。そんな菅野さんから見た大滝先生は…。「大滝先生に叱られた記憶はないですね。どんな生徒でもいい所を見つけて、「ほめて育てる」先生でした。詩を書くような課題もありましたが、そんなときも、それぞれをほめてくれて…。ほめられると嬉しくなって、また詩を書くようになる。そうやって伸びていく人、詩や文芸に興味をもつ人ができてきたのだと思います。人間的にも人格者でしたよ。戦争に行つて軍人をやっていたとは思えない方でした。」

「子どもがいい面を伸ばす」という先生のそういった姿勢は、教育の原点だと思います。もちろん、家庭においても…。詩の世界でも現代詩の中に「非連続の連続」という独特の詩論を確立するなど、さまざまな功績を残されました。矢吹は詩も含め、文学愛好者が多い町ですが、大滝先生の影響も大きいと思いますね。」



菅野昌和さん■東郷在住。農業の傍ら詩の創作に取り組む。「矢吹ペンクラブ」会員。「さわやか詩集」の審査員も務める。大滝清雄さんの教え子でもある。



後列の一番左が大滝先生。当時の陸上部員との一枚。

『星の夜の幻想』

（「純大滝清雄詩集」教育詩抄から）

深い秋の夜空から降ってくる星時雨のように
こどもの輝くひとみひとみが
教えている者のまぶたに ほおに 首すじに
ばらばらといたく吹きつける瞬間がある。

そんな 瞬間—。
教室の中から天心まで しゅんと あおあお澄
みどおり
いっさいの物音が ふいに止まる。

そんな 瞬間—。
こどもの内都に教える者のいのちが乗り移り
教える者の中にこどものいのちがしのび入って
たがいのいのちが貫きあい
たがいに それがとけあつて
それが鷹揚に深く息づきはじめる—。
ひとつの生きた空間となり
ふいに そんな瞬間が開けることがある。
そんな瞬間には こどもたちのたましいが
大きく眼をあげ

きつと 見つめているのにちがいない。
教師のなかの 大きくあたたかな空気に包まれ
天心のひとつひとつの星のように
安らぎに満ちたおのれのこころが
もつとも 美しく こうこうと
ひかり 輝いているのを。